慶讃法要と領解文

領解文

もろもろの雑行雑修自力の心をふりすてて一心に阿弥陀如来われらが今度の一大事の後生御たすけそうらえとたのみもうしてそうろう。

たのむ一念のとき、往生一定御たすけ治定とぞんじ、このうえの称名は、ご恩報謝とぞんじよろこびもうしそうろう。

この御ことわり聴聞もうしわけそうろうこと、御開山聖人ご出世のご恩、次第相承の善知識のあさからざるご勧化のご恩と、ありがたくぞんじそうろう。

このうえは、さだめおかせらるる御おきて、一期をかぎりまもりもうすべくそうろう。

新しい「領解文」（浄土真宗のみ教え）

南無阿弥陀仏
「われにまかせよ
　そのまま救う」の
　　弥陀のよび声
私の煩悩と仏のさとりは
本来一つゆえ
ありがとうといただいて
この愚身をまかす　このままで
救い取られる　自然の浄土
仏恩報謝の　お念仏

これもひとえに
宗祖親鸞聖人と
法灯を伝承された　歴代宗主の
尊いお導きに　よるものです
み教えを依りどころに
　生きる者となり
少しずつ
執われの心を　離れます
生かされていることに感謝して
むさぼり　いかりに　流されず
穏やかな顔と　優しい言葉
喜びも　悲しみも　分かち合い
日々に　精一杯　つとめます

先月号に続いて「新しい領解文」について述べます。

先月号ではご消息として発布された原文を示していませんでした。お詫びを申し上げ改めて上記二段目に掲示します。

先月述べたところが最初の赤字の部分です。**私の煩悩と仏のさとりが本来ひとつ**などということは浄土真宗のみ教えにはありません。

領解とは阿弥陀さまの勅命を受け取り、その道理を理解して身につけることを言います。法話を聴聞した後、私の領解はこのとおりですと申すことが領解文の心で、蓮如上人の作といわれる「領解文」（上記一段目・以後、旧来・領解文と表示）を申すことで、このようにいただきましたと自分の信心を明らかにすることです。ですから、領解文の中に宗意安心からはずれる異安心が含まれていては私は申すことはできません。

今回の「新しい領解文」は異安心が含まれているうえに、更に「旧来領解文」から変化したところがあります。それが二つ目の赤文字で示しているところです。

旧来・領解文の「次第相承の善知識」とは歴代宗主はもちろんのこと、私の周りで阿弥陀さまにお仕えしなさいとすすめてくれる人も含みます。そんな人の縁で私は阿弥陀さまのお育てをいただいています。「新しい領解文」は善知識を歴代宗主に限定しています。悲しいことです。

最後に残りの赤文字二つの部分、親鸞聖人は『一念多念文意』に「いかり・はらだち・そねみ・ねたむ心、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」とお示しです。どれだけ努力しても執われの心から離れることができず、むさぼり、いかりに流されていく私です。

「できないことをします」と言うことなどできるわけはありません。そんな「新しい領解文」、一刻も早く取り下げてほしいと思うことです。

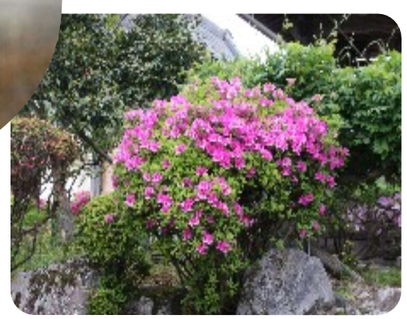
領解文は蓮如上人作のもの一つで良いと思います。

法語の世界

《原文》

御普請御造作の時、法敬申され候ふ。なにも不思議に、御眺望等も御上手に御座候ふよし申され候ば、前々住上人（蓮如）仰せられ候ふ。われはなほ不思議なることを知る。凡夫の仏に成り候ふことを知りたると仰せられ候ふと。

（『蓮如上人御一代記聞書』二百八十四）

《現代語訳》

蓮如上人が御堂を建立されたとき、法敬坊が、「何もかも不思議なほど立派で、ながめなども見事でございます」と申し上げたところ、上人は、「わたしはもっと不思議なことを知っている。凡夫が仏になるという、何よりも不思議なことを知っているのである」と仰せになりました。